

# 春夏秋冬 台湾徒然

第31回

## 黒潮が分かつ海峡

柳本通彦

さる6月26日朝6時、一艘のシーカヤックが台湾東部の花蓮港をあとにして太平洋の大海原に漕ぎ出した。目指すは「日本」である。

日本最西端与那国と台湾本島最東端台北県の距離は約1100キロ。しかし、最短距離で進むわけにはいかなかった。なにしろ両島の中間を黒潮が最高時速8キロで南から北へ流れている。ちょうど大河を横切るようなものである。

冒険の主人公・八幡暁さん（32歳）は、出発地を100キロ以上南の花蓮港とし、最終目的地を石垣に設定した。

カヤックは遠目にはカヌーにしかみえない。一人乗りの小さなボートで、黒潮を漕ぎ渡ろうというのである。しかし、八幡さんは、豪州やインドネシアにも遠征し、西表島から那覇まで500キロの単独無伴走縦断に成功し

た人でもある。

両腕で櫂を漕ぎ続け27時間余り、27日午前10時40分与那国の祖内港に到着。彼は、自らのホームページの中でこう書いている。「シビアな状況の中、定期連絡以外は、ほとんど漕いでいた。ナビゲーションを間違えれば、簡単に失敗する難しい状況だった」と。そして諸般の事情から石垣への航行は断念せざるをえなかったのである。

台湾あるいは沖縄に関心をもつ多くの人々が、台湾と八重山諸島の歴史と文化の異同を考える。古代人は自由に行き来していたのではないか、どこかに往來の痕跡はないかとさまざまな研究調査が重ねられてきた。しかし実際にこの黒潮を漕ぎ渡ることはそう容易なことではないことを八幡さんの冒険は教えてくれている。



台湾東部原住民の集落を訪問した八重山の人々

一方で、与那国にはかつて不思議な風習があった。人の大きさほどの大きさならじを編んで海に流すというものである。これが威嚇のためだとすると、隣の台湾に「怖い人たち」がいることを知っていたのかもしれないと空想が膨らむ。かつて台湾原住民には首狩の習俗があったからである。

昔のことはまだ不明なことが多いが、八重山と台湾東部の人たちとの官民の交流はますます盛んになる気配がある。与那国町と花蓮市、石垣と蘇澳がそれぞれ姉妹都市、石垣港と花蓮港が姉妹港、そして東部の原住民歌舞団が石垣を訪れたり、逆に石垣の人が原住民の集落を訪れたりしたこともある。天性の音感、唄の遊び方など海を隔てた両地の人々には共通するものが多い。

台湾と沖縄は、歴史のボタンがどこかずれていたら、沖縄が独立国となったり、台湾が日本国台湾州となった可能性だつて否定できない。また今、那覇港で扱っている貨物の3分の1は台湾関係だという。

しかし実は、台湾当局は一貫して「沖縄県」の存在を認めてこなかった。遡れば、1879年（明治12）の明治政府による沖縄県設置を承認しなかったのである。だから台湾の学校で使われている地図には沖縄県の記載がなく、琉球群島とあるのみ。台湾へのビザ発給機関も東京や大阪とは別組織だったし、台湾へ来る沖縄県民は「日本人」の枠には入れてもらえなかった。最近、その政策を改めるといふ発表が台湾当局からもたらされた。ようやく沖縄を日本の領土と認めるといふのである。これでようやく台湾の地図にも「沖縄」が印字されることだろう。黒潮が滔滔と流れる海峡がちよつと短くなったような気がしないでもない。

やなぎもと・みちこ  
京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」（現代書館）、「台湾革命」（集英社新書）、「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）